

令和 6 年 5 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13397

研究課題名（和文）中央ユーラシア出土品からみた古代の染織品流通と技術伝播に関する研究

研究課題名（英文）Circulation of Ancient Textiles and Transmission of Textile Techniques from the Perspective of Central Eurasian Archaeological Materials

研究代表者

村上 智見（Murakami, Tomomi）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・特任助教

研究者番号：70722362

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、広く古代日本とユーラシアを舞台に、「どのような染織品が、どこで生産され、どこへもたらされたのか？」を明らかにすることを目的に、紀元前後から正倉院宝物がもたらされた8世紀頃までの染織品に着目し、中央ユーラシア（主にウズベキスタン、モンゴル）出土品の調査を実施した。ウズベキスタンでは初期鉄器時代の土器布圧痕、および8世紀初頭の炭化繊維製品の調査を進め、これまで知られていなかった様々な種類の高品質な織物を確認した。モンゴルでは柔然期および靺鞨支配下のトルコ系遊牧民の織物の分析をさらに詳細に進め、シルクロードにおける織物の広がりや騎馬遊牧民の織物文化について重要な成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的価値のある高級染織品に加えて、従来ほとんど着目されることのなかった単純な技法の染織品や断片にも着目し、発掘現場において織物を保存処理するなど資料の増加を図った。また未報告資料を網羅的に調査した。その結果、これまで知られていなかった様々な種類の織物を明らかにすることができた。将来的にシルクロードにおける織物の流通・生産および織物産地を特定する上で重要な情報を得られたことに学術的意義がある。社会的意義としては、大陸の影響を受け発展してきた古代日本文化を知る上でも必要な研究であり、日本人が自らの歴史・文化の成り立ちを知る上でも意義ある成果と考える。これらの成果は講演会などで積極的に発信した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I aimed to clarify the types of textiles produced and distributed in ancient Japan and Eurasia by conducting investigations primarily on artifacts unearthed among Central Eurasian regions.

In Uzbekistan, I investigated on textile impressions left on pottery from the early Iron Age and the examination of carbonized textile products from the early eighth century. As a result, we identified various types of high-quality textiles that were previously unknown. In Mongolia, I investigated and delved into a more detailed analysis of textiles from the Rouran Khaganate and those of Turkic horse-riding nomads under the control of the Tang dynasty. Consequently, significant findings were obtained regarding the spread of textiles along the Silk Road and the textile culture of horse-riding nomads.

This has yielded significant results in understanding the spread of textiles along the Silk Road and the textile culture of horse-riding nomads.

研究分野：考古学、文化財科学

キーワード：考古学 染織品 東西交流 シルクロード

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

紀元前 3000 年ごろ、中国で生まれた「絹」は彼らだけが持つ門外不出の製法であった。この軽くて薄く光沢のある美しい布は、中国の重要な交易品として、西はエジプト、南はインド、北はシベリア、そして東は日本にまでもたらされ珍重された。やがて絹の製法は日本やユーラシア各地に伝播し、競って生産されるようになった。ユーラシア各地の遺跡では東西の絹が混在して出土している。

伝世品として世界に類を見ないコレクションを有する我が国の法隆寺・正倉院所蔵の染織品中にも、国産の他に中国産、新羅産と推測されるものや、西アジア的意匠を持つものが多数見受けられる(松本包夫 1984『正倉院裂と天平飛鳥の染織』)。これらの豊富な伝世資料によって我が国の染織研究は発展してきたが(佐々木信三郎 1951『日本上代織技の研究』)、輸入品か国産品か?、輸入品であるならどこで製作されたのか?、いまだ不明な点が多い。その要因として、古代日本の絹織物製作技術は中国から導入されたものであり、さらに文様も中国のものを模倣したことにある。

さらに複雑なのは、当時の中国ではペルシャやソグドなどの西方文化が流行しており、染織品にもたびたびその意匠が取り入れられたことである。中央アジア(ソグディアナやタリム盆地)においても同様の現象が見られ、ペルシャ風の意匠が大いに模倣された。つまり、技法も文様もよく似た染織品が、ユーラシア各地で生産され東西に流通したのである。これが日本およびユーラシアにおいて産地同定を難しくしている大きな要因となっている。

出土染織品が豊富な中国(タリム盆地、青海省出土品など)では盛んに研究が行われており(趙豊 1999『織綉珍品』)、旧ソ連出土コレクション研究も国内外の研究者らによって発展してきたが(坂本和子 2007『染織に見るシルクロードの文化交流』)、中央アジアやモンゴル、シベリア、コーカサス地域などにはいまだ未調査資料が多く、研究は不十分である。

### 2. 研究の目的

本研究では、広く古代日本とユーラシアを舞台に、「どのような染織品が、どこで生産され、どこへもたらされたのか?」を明らかにすることを目的と史研究を実施した。中国漢代から正倉院宝物がもたらされた 8 世紀頃までの染織品に着目し、中国出土品に加え未調査資料の多い中央ユーラシア(中央アジア・モンゴル・シベリア・コーカサス地域)出土品について、科学的調査などを実施することで生産地ごとの特徴を明らかにしようとした。具体的には中国製、タリム盆地製、ソグディアナ製の特徴を分類するとともに、これまでの申請者の研究で明らかとなった「どれにも当てはまらない地域色のある資料」について分析を進め、これまでに知られていない生産地の存在について検証した。

### 3. 研究の方法

本研究では、従来の染織研究において個々に研究されがちであった染織品の 文様の図像学的研究、 織技術の分析学的研究、 文字資料を扱う史料学的研究、 民俗調査、 科学的調査を総合的に実施した。電子顕微鏡観察などにより、炭化や金属錆着化などで色彩を失った小断片からも多くの情報を引き出すことができた。また、民俗調査により考古資料の分析を行い、技法解明を試みた。さらに、本研究では染織品に保存修復を施し資料数の増加を図った。具体的には以下のような計画で研究を進めた。

#### A. 中央ユーラシア各地の織物技術体系を復元する

在地の伝統的な織物技術が高級絹織物の製作に影響を与えたと考えられることから、従来のシルクロード織物研究では着目されなかった断片資料や炭化・金属錆着資料、布圧痕などの調査も実施し、地域ごとの織物技術体系を復元しようとした。シルクロードに流通した高級絹織物は広範囲で技術・文様が類似し製作地同定が困難な場合があるが、在地の伝統的な技術が高級絹織物製作に与えた影響が見受けられる。そのため、在地の伝統的な染織文化を復元し、技法・材質等の共通点から高級絹織物の生産地を検討した。ウズベキスタンやモンゴルでは当該地域にしか見られない独自の技法が複数存在することを明らかにした。

#### B. 製作地別の染織品の特徴を明らかにする

これまでの研究で、糸の撚り・径・断面や織密度、文様のはつり、材質など、製作地によって織技や糸の材質に違いが見られることがわかってきた。本研究ではさらに資料数を増やし、製作地別の特徴を明らかにしようとした。特にソグディアナおよびモンゴル高原の織物を分析し、これまで知られていなかった新たな染織品生産地について検証した。

#### C. 地域間交流および交易ルートを復元する

これまでの染織研究で空白地帯となっていた中央ユーラシア(特にソグディアナと北方草原地帯)において未調査資料調査、および科学的調査を実施し、技術伝播と染織品の流通状況を明

らかにしようと試みた。これにより、地域間交流および交易ルートの復元するにあたって重要な成果が得られた。

#### 4. 研究成果

本研究では、紀元前後から正倉院宝物がもたらされた8世紀頃までの染織品に着目し、中央ユーラシア（主にウズベキスタン、モンゴル）出土品の調査を実施した。ウズベキスタンでは初期鉄器時代の土器布圧痕、および8世紀初頭の炭化繊維製品の調査を進め、これまで知られていなかった様々な種類の高品質な織物を確認した。モンゴルでは匈奴期、柔然期、羈縻支配下のトルコ系遊牧民の織物の分析を進め、シルクロードにおける織物の広がりや騎馬遊牧民の織物文化について重要な成果が得られた。具体的な成果は以下のとおりである。

##### (1) ソグド製棉織物の特徴

ウズベキスタンのカフィル・カラ遺跡（ソグディアナの都市遺跡）から出土した8世紀初頭の炭化染織資料の収集および分析を進めた。その結果、一般的な平織の他に、綾織、絵緯のある縞文様織物、パイル織物様繊維製品、フェルト様繊維製品、もじり組織など、豊富な種類の棉織物の存在を明らかにした。これまでソグドの棉織物は、ムグ山上遺跡からまとめて出土している他、サンジャル・シャーの子供用衣服などが知られていたが、いずれの種類も平織であった。また、ムグ文書などの一次史料にもソグドの棉が登場しており、絹織物と同様に貨幣価値を持っていたことが推測されるが、これらの文書からはどのような綿織物の種類が存在していたのかは不明であった。ソグディアナにおいて様々な技法の高品質な綿織物が生産・使用されていたことを、本研究によって初めて明らかにすることができたことは大きな成果である。

##### (2) モンゴル高原の騎馬遊牧民の織物

匈奴、柔然、唐の羈縻支配下にあったトルコ系遊牧民、およびモンゴル帝国期の織物の分析を進めた。いずれの時期にも中国製の絹が大量に騎馬遊牧民へもたらされていたことが実物資料から証明できた他、羈縻支配期には西域製の絹織物ももたらされていたことも明らかになった。また、いずれの時期にも共通して、中国製の絹織物と在地の伝統的な毛製品を組み合わせ、独自の染織文化を築いていたことが明らかになった。

##### (3) 中央アジアの初期鉄器時代の織物

ウズベキスタンのコク・テパ遺跡から出土した初期鉄器時代の土器布圧痕について集中的に調査を行った。当該地域においては7世紀以前の実物の織物資料がほとんど出土しておらず、布圧痕から織物文化を明らかにしようと試みた。その結果、平織、綾織、編布など7種類もの技法を明らかにすることができた。中には糸が細く、単糸および織密度が均質の非常に高品質な織物もみられた。以上から、当該地域ではすでに初期鉄器時代に、単なる平織布だけではない高級織物が製作されていたことを明らかにすることができた。本研究成果は学会発表1件を行ったほか、セミナー報告1件を行うことができた。セミナーでは本研究成果を論文形式で提出しており、今後ブラッシュアップして学会誌に投稿予定である。

本研究成果は、論文5本、学会報告7件（内5件は報告集・要旨集あり）において発表することができた。

#### 【論文】

- 村上智見 ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡出土木彫板の保存修復 ラーフィダーン  
村上 智見, A. オチル, L. エルデネボルド (2021) 「モンゴル国の唐様式墓から出土した染織品: 僕固乙突墓とオラーン・ヘレム壁画墓」 『金大考古』 82, pp.52-67  
村上 智見, A. オチル, 陳永志, B. アンフバヤル, 薩仁畢力格, 程鵬飛, Kh. ツェレンビヤンバ, 丹達爾 (2021) 「タリン・ゴルワン・ヘレム 城址 1A-1 号墓から出土した4~6世紀の染織品」 『金大考古』 82, pp.8-15  
村上智見 (2021) 「旧ソ連圏から出土した染織品の研究」 『金大考古』 80, pp.131-134  
村上智見 (2023) 「チャンドマニ・ハル・オール遺跡出土繊維の調査」 『金大考古』 82, pp.72-80

#### 【要旨集・報告集】

- 村上智見、レウトヴァ・マリナ (2019) 「ウズベキスタン カフィル・カラ遺跡出土木彫の保存修復」 『東アジア文化遺産保存国際シンポジウム要旨集』  
村上智見、ベグマトフ・アリシエル、寺村裕史、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディ、宇野隆夫、宇佐美智之 (2021) 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果 - 出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流 - 」 『西アジア遺跡調査報告会報告集』 pp.80-84  
村上 智見, 寺村 裕史, 宇野 隆夫, Begmatov A, Berdimrodov A, Bogomolov G, Sandiboev Alisher (2022) 「ソグド王の離宮を掘る - ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区) 2021年度発掘調査 - 」 『第29回西アジア発掘調査報告会報告集 令和3年度

考古学が語る古代オリエント要旨集』 pp.23-27

村上智見、ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、フジャモフ・サナト、宇野隆夫、寺村博史(2023)「ソグディアナの都市を探る - ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2022年度) - 」『第30回西アジア遺跡調査報告会要旨集 令和4年度考古学が語る古代オリエント報告集』 pp.94-97

村上智見(2023)「Textile Culture of the Early Iron Age in Central Asia Based on Investigations of Textile Impressions on Pottery Excavated from the Kok-Tepa Site in Uzbekistan(中央アジア初期鉄器時代の織物文化ーウズベキスタンのコク・テパ遺跡出土土器布圧痕の調査からー)」『2023 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム要旨集』 pp.559-562

#### 【学会報告】

村上智見、レウトヴァ・マリナ「ウズベキスタン カフィル・カラ遺跡出土木彫の保存修復」東アジア文化遺産保存国際シンポジウム、2019年8月30日

寺村裕史、村上智見「ウズベキスタン・カフィルカラ遺跡の調査と保存」東京文化財研究所第33回東アジア・中央アジア分科会、2021年5月14日

村上智見「ユーラシア北方草原地帯における古代騎馬遊牧民の染織文化」第1回先住民文化研究会、2021年7月31日

村上智見、ベグマトフ・アリシエル、寺村裕史、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディ、宇野隆夫、宇佐美智之「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果 - 出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流 - 」西アジア遺跡調査報告会、2021年3月28日

村上 智見, 寺村 裕史, 宇野 隆夫, Begmatov A, Berdimirodov A, Bogomolov G, Sandiboev Alisher「ソグド王の離宮を掘る - ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2021年度発掘調査 - 」第29回西アジア発掘調査報告会報告集 令和3年度 考古学が語る古代オリエント、2022年3月12日

村上智見、ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、フジャモフ・サナト、宇野隆夫、寺村裕史「ソグディアナの都市を探る - ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2022年度) - 」第30回西アジア遺跡調査報告会要旨集 令和4年度考古学が語る古代オリエント、2023年3月26日

村上智見「Textile Culture of the Early Iron Age in Central Asia Based on Investigations of Textile Impressions on Pottery Excavated from the Kok-Tepa Site in Uzbekistan(中央アジア初期鉄器時代の織物文化ーウズベキスタンのコク・テパ遺跡出土土器布圧痕の調査からー)」2023 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム、2023年8月11日

#### <参考文献>

松本包夫(1984)『正倉院裂と天平飛鳥の染織』紫紅社

佐々木信三郎(1951)『日本上代織技の研究』(川島織物研究所報告 第2報)、川島織物研究所  
坂本和子(2007)『織物に見るシルクロードの文化交流 トウルファン出土染織資料 錦綾を中心に』同時代社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 村上智見	4. 巻 82
2. 論文標題 チャンドマニ・ハル・オール遺跡出土繊維の調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 72-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00069165	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上智見、ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、フジャモフ・サナト、宇野隆夫、寺村博史	4. 巻 -
2. 論文標題 ソグディアナの都市を探るーウズベキスタン共和国クルゴン・テバ遺跡発掘調査（2022年度）ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第30 回西アジア遺跡調査報告会要旨集 令和4年度考古学が語る古代オリエント	6. 最初と最後の頁 94-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上智見	4. 巻 80
2. 論文標題 旧ソ連圏から出土した染織品の研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 131-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上 智見, 寺村 裕史, 宇野 隆夫, Begmatov A, Berdimirovov A, Bogomolov G, Sandiboev Alisher	4. 巻 第29回
2. 論文標題 ソグド王の離宮を掘るーウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡（シャフリスタン地区）2021年度発掘調査 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集 令和3年度 考古学が語る古代オリエント	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上智見、ベグマトフ・アリシエル、寺村裕史、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナ ディ、宇野隆夫、宇佐美智之 他	4. 巻 第28回
2. 論文標題 ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果 - 出土遺物に見るカフィル・カラ の文化交流 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西アジア遺跡調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 80-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 村上 智見, A. オチル, L. エルデネボルド	4. 巻 79
2. 論文標題 モンゴル国の唐様式墓から出土した染織品: 僕固乙突墓とオラーン・ヘレム壁画墓	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 村上 智見, A. オチル, 陳永志, B. アンフバヤル, 薩仁畢力格, 程鵬飛, Kh. ツェレンビャンバ, 丹達爾	4. 巻 79
2. 論文標題 タリン・ゴルワン・ヘレム 城址1A-1号墓から出土した4~6世紀の染織品	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金大考古	6. 最初と最後の頁 8-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 村上智見	4. 巻 XLI
2. 論文標題 ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡出土木彫板の保存修復	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ラーフィダーン	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村上智見、ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、フジャモフ・サナト、宇野隆夫、寺村裕史
2. 発表標題 ソグディアナの都市を探る－ウズベキスタン共和国クルゴン・テバ遺跡発掘調査（2022年度）－
3. 学会等名 第30回西アジア遺跡調査報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 村上 智見, 寺村 裕史, 宇野 隆夫, Begmatov A, Berdimirovov A, Bogomolov G, Sandiboev Alisher
2. 発表標題 ソグド王の離宮を掘る－ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡（シャフリスタン地区）2021年度発掘調査 -
3. 学会等名 第29回西アジア発掘調査報告会 令和3年度 考古学が語る古代オリエント
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村上智見
2. 発表標題 ユーラシア北方草原地帯における古代騎馬遊牧民の染織文化
3. 学会等名 第1回先住民文化研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺村裕史、村上智見
2. 発表標題 ウズベキスタン・カフィルカラ遺跡の調査と保存
3. 学会等名 東京文化財研究所第33回東アジア・中央アジア分科会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上智見、ベグマトフ・アリシエル、寺村裕史、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディ、宇野隆夫、宇佐美智之
2. 発表標題 ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果 - 出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流 -
3. 学会等名 日本西アジア考古学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上智見、レウトヴァ・マリナ
2. 発表標題 ウズベキスタン カフィル・カラ遺跡出土木彫の保存修復
3. 学会等名 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村上智見
2. 発表標題 Textile Culture of the Early Iron Age in Central Asia Based on Investigations of Textile Impressions on Pottery Excavated from the Kok-Tepa Site in Uzbekistan (中央アジア初期鉄器時代の織物文化ーウズベキスタンのコク・テパ遺跡出土土器布圧痕の調査からー)
3. 学会等名 2023東アジア文化遺産保存国際シンポジウム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 SRC生存戦略研究セミナー「草原とオアシスの文化交流ー「周縁」の役割を探るー」	開催年 2023年～2023年
---	--------------------



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------